

「記号づけ」再考:助動詞扱いの句動詞について

寺島 隆吉

はじめに

記号研究会の戸梶さんから「掲示板」を通じて、「have to、had better、ought to、be going to、be able to」などの扱いについて下記のような質問が寄せられています。そこで若干の考察を試みることにします。

記号の付け方についての質問 投稿者：戸梶邦子 投稿日：6月24日(土)

今まであまり考えなかったことなのですが、have to , had better, ought to, be going to, be able to, などの扱いについて、最近、他の先生に質問されてきちんと答えられなかったこと、生徒に記号をつけさせて、迷いだした記号の付け方について質問があります。

1. have to の場合はすべて have to で区切られます。

肯定文 (have to | 原型) 否定文 (do | not | have to | 原型)

疑問文 (Do | I | have to | 原型)

2. had better, ought to の場合は 肯定文と否定文、疑問文で分割される箇所が変わるのは、使い方に気をつけるようにということで済ませてきたのですが、それでいいのでしょうか。肯定文 (had better | 原型) (ought to | 原型)

否定文 (had better | not | 原型) (ought | not | to 原型)

疑問文 (Had | 主語 | better | 原型) (Ought | 主語 | to 原型)

3. be going to, be able to の場合は 疑問文・否定文にすることを考えると

(be going to | 原型) (be able to | 原型) より、

(be | going to 原型) (be | able to 原型)

にする方が、生徒が混乱することがないのか。

4. 接続詞の取り扱いで、四角□をつける場合は 必ず、その後に述語動詞があるということで教えてきたのですが、分詞構文の場合の接続詞は付けたほうがいいのか、迷いだしました。

例えば、While living in the nature of Alaska, Hoshino came to form the following view of nature. の While の扱いは、四角□をつけると、後ろには述語動詞はないのですが。

このような質問に対して会員の山田昇司さんから次のような解答が翌日および翌々日の掲示板でされています。

「助動詞、分詞構文の記号付け」について 投稿者：山田昇司 投稿日：6月25日(日)

助動詞の記号付けについては、記号付け入門②『読みの指導と英文法』（寺島隆吉編 1990）第2章において、can be seen と would like to を例にとって取り上げられています。また、分詞構文の記号付けについては、『英語授業への挑戦』（寺島美紀子 1990）第1章第2節で触れられています。詳しくはそちらを読んでもらうと分かりますが、それを踏まえて以下に私の回答を記します。

1. have to の場合はすべて have to で区切られます。

肯定文 （ have to | 原形 ） 否定文 （ do | not | have to | 原形 ）

疑問文 （ Do | I | have to | 原形 ）

『センマルセンで英語が好きに変わる本』（寺島隆吉・寺島美紀子 2004）においては、have to が左半丸ですが、『魔法の英語』（寺島隆吉 2001）では have が丸、to 原形は[]で記号付けされ、ヒントとして have to～「～することを持っている」→「～しなくてはならない」が与えられていたと思います。（いま手元に無くて確認できませんが、確かそうだったような気がします。）前者は英訳教材で後者は和訳教材ですが、つまり、「その時の目的によってどちらを採用してもよい」（寺島 1990）のではないかと思います。

2. had better、ought to の場合は、肯定文と否定文、疑問文で分割される箇所が変わるのは、使い方に気をつけるようにということで済ませてきたのですが、それでいいのでしょうか。

肯定文 （ had better | 原形 ） （ ought to | 原形 ）

否定文 （ had better | not | 原形 ） （ ought | not | to 原形 ）

疑問文 （ Had | 主語 | better | 原形 ） （ Ought | 主語 | to 原形 ）

上記のような記号付け（意味のまとまり単位を左半丸とする）で私はいいと思います。「どうして ought だけに丸を付けてはいけないのか」と生徒が出てきたら、辞書で助動詞の原義を調べさせてみるといいかもしれません。助動詞がもともとは動詞だったことが分かります。『英語のしくみが見える英文法』（酒井典久 2005）には、had better という表現が成立した経過が書かれていますので以下に紹介します。

90年代後半に文献に You were better do it at once. という表現が登場した。were は仮定法過去である。当時は to があまり発達しておらず to do ではなく do だった。ところが、1400年代に were が had に取って替われ始め、You had better do it at once. という表現が生まれた。同じ現象は、be to do（～しなければならない）にも起こり、have to do という表現が出来ている。[were が had になった理由については書かれていない。]

その後 had better は 'd better と省略されるようになって would と混同されるよう

になり、had は助動詞化され、better は形容詞から副詞化された。

3. be going to, be able to の場合は 疑問文・否定文にすることを考えると

(be going to | 原形) (be able to | 原形)

より、

(be | going to 原形) (be | able to 原形)

にする方が、生徒が混乱することがないのか。

2で述べたように慣用的な言葉のまとまりを左半丸と考えて、前者でいいのではないのでしょうか。「疑問文や否定文を作るときは意味の塊が分離することがある」と説明してはどうでしょうか。

4. 接続詞の取り扱いで、四角□をつける場合は 必ず、その後に述語動詞があるということで教えてきたのですが、分詞構文の場合の接続詞はつけたほうがいいのか、迷いだしました。

例えば、While living in the nature of Alaska, Hoshino came to form the following view of nature. の While の扱いは、四角□をつけると後ろには述語動詞はないのですが。

While living in the nature of Alaska, Hoshino came to form the following view of nature. という文の場合は、While [he was] living in the nature of Alaska, Hoshino came to form the following view of nature. と考えると、主語と左半丸が省略されていることになります。

ただ、when とか as など他の接続詞の場合はこのような処理は出来ないので、より一般化した記号付けを考えると、接続詞を前置詞のようにみなして living は動名詞 (右半丸) となります。[この考え方は先に紹介した酒井(2005)の「分詞構文の分詞は動名詞である」という主張と共通する。]

[While [| living) in the nature of Alaska,]] Hoshino came to

この点に関して、『英語授業への挑戦』(寺島美紀子 1990) 第1章第2節の Notes 10 は「by という前置詞も、連結詞ではないが、四角で囲んでみたらもっとはつきり埋め込み文が見えてくるかもしれない」と述べている。この考え方に従えば以下のようなになる。

While [living in the nature of Alaska,] Hoshino came to

以上のことから考えると、「□の後には述語動詞の他に、それが変形した準動詞が来ることもある」とまとめることが出来るかもしれない。

訂正 投稿者：山田昇司 投稿日：6月26日(月)

『魔法の英語』(寺島隆吉 2001)では、have が丸、to 原形は[]で記号付けされ、ヒントとして have to～「～することを持っている」→「～しなくてはならない」が与えられていたと思います(いま手元に無くて確認できませんが、確かそうだったような気がします)。

昨日の投稿で以上のように書きましたが、実際に確認したところ、have to (had to) は左半丸になっていました（3カ所）。ただ、shall have to wait では左半丸と右半丸に挟まれた口になっています。いずれにしても、have to は「～しなくてはならない」でまとめてありました。

1. 以上の山田さんの回答に異論は余りないのですが、「have to, had better, ought to, be going to, be able to」などの扱いについて、最近の私は「have to, be going to, be able to」の動詞部分 have, be going, be を丸で囲む以外は何もしていません。

確かに「have to」は学校文法では助動詞 must と同じに扱われていますから、左半丸にしたいのですが、「方向」を示す前置詞 to が動詞を次に持つ場合（すなわち have to + 動詞）は、そのような動作をする方向に自分の気持ちを持っている (have) わけで、その気持ちが強くなれば「義務感」に変化します。

同じことは「be to + 動詞」の場合で言えます。この場合も、そのような動作をする方向に気持ちが存在している (be) ので、文脈によって「予定」「義務」「運命」「目的」「意図」「可能」などになるわけです。

We are to meet at seven. 7時に会うことになっている。

The form is to be filled in and returned within two weeks. この用紙は必要事項を記入の上2週間以内に返送のこと。

After his accident, he was never to get a chance to play in a real game. 事故の後、彼は公式試合に出場する機会を得ることは二度となかった。

If you are to succeed in your new job, you must work hard now. 今度の新しい仕事で成功するつもりなら、君は今懸命に働かねばならない(=If you mean to succeed ...).

The letter was to announce their engagement. 手紙は彼らの婚約を知らせるためのものでした。

The ring was not to be found anywhere [was nowhere to be found]

指輪はどこにも見つからなかった(=The ring couldn't be found ...).

また、このように have のみを丸で囲むことによって、疑問文や否定文のときに助動詞 do が必要になることが自然に説明できます。もちろん、have to を助動詞として教えられ、そのように信じ込んでいる生徒と不毛な論争に時間を費やしたくなければ、have to を左半丸にしておいて、疑問文・否定文は特殊な使い方をすると説明しておく方法もあるでしょう。

2. 以上のことは「be going to, be able to」においても同じです。

まず「be going to + 動詞」についてですが、これが「未来」を表すのは、心が不定詞で表される動作をするに方向に向かって動いて (going) いる (be) からで、基本的には「be to + 動詞」と同じです。それを抽象的ではなく、より具体的に表現したものが、「be going to + 動詞」だと考えることができるでしょう。

次に、「be able to+動詞」ですが、これが「可能」を表すのは、「不定詞で表される動作が可能な(able)方向にある(be)」からで、これを「可能を表す助動詞」として丸暗記をする必要は全くないのではないのでしょうか。形容詞ableの意味さえ知っていれば、自然と意味が取れるのではないかと考えます。

また、このようにbe動詞を左半丸で囲み、goingを右半丸で囲めば、疑問文がbe動詞を前に出し、否定文がその後ろにnotを置くことになるのは、極めて自然の成り行きです。これは「be able to+動詞」についても全く同じです。それを助動詞扱いにするから、あとで疑問文・否定文を指導するときに困ったことになるのです。

3. さて最後の「had better, ought to」ですが、まず「had better」について検討します。インターネットで「had better」を検索してみたら次のような叙述が見つかりました。

[最強の英文法・ブログ had better の成り立ち](http://4fukuoka9.blog2.fc2.com/blog-entry-595.html)

<http://4fukuoka9.blog2.fc2.com/blog-entry-595.html>

現在のことを過去形で表現するときは、だいたい仮定法過去です。現在の事実と反することを言うときに使います。批判的な意味を持つことが多いようです。

It is time you went to bed. 「もう寝る時間ですよ（もう寝る時間なのにあなたは寝ていない!）」と言うのも同じです。

You **had better** study. 「勉強した方がいいぞ！（勉強しなければいけないのにしていない!）」相手を批判している感じがします。

さて「成り立ち」という質問ですが、これはもともと You were **better** study. の形でした。to study の形をとっていないのは、この形が登場した 900 年代後半では to がまだあまり発達していなかったからです。study は当然「原形」で「勉強すること」です。「あなたは勉強することがよりよい」→「あなたは勉強した方がよい」という意味です。1400 年代に入って、were の代わりに **had** が使われるようになります。were 「～の状態が存在する」の代わりに **had** 「～の状態を持つ」と言われるようになります。これは、be to do 「～すべき」が have to do 「～すべき」と言われるようになるのも同じです。なお、**had better** は「目上の者が目下のものに使う表現」なので使い方に注意すべきである。

この記述を見る限り、「be to+V」→「have to+V」と同じ変化が「were better (to) +V」→「had better (to) +V」に起きたと考えているようです。しかし、なぜ「be to+V」→「have to+V」という変化が起きるのか、そのメカニズムはこの記述だけでは分かりません。

それはともかく「had better」が仮定法であることは確かでしょう。では、比較級「better」の比較対象は何で、どこに「仮定」が含まれているかを考えると、次のようになるのではないのでしょうか。

You **had better** [to] study [than not to do] [if possible]. もし可能なら(勉強しないよりも)勉

強した方が良い。

<比較: I should have *known better than to* call him. 彼に電話をするようなことをすべきではなかった。(ランダムハウス英語辞典)>

次に問題になるのは、この否定形は何故「had better not (to) do」になるかということです。これは次の(1)(2)を比較してみると、その理由がよくわかるのではないのでしょうか。

(1) I *tried* hard not to laugh at his classic gesture of despair. 彼の時代がかつた絶望のしぐさを見て笑うまいと懸命に努めた。(ランダムハウス英語辞典)

(2) We *had better* not stay indoors today. 今日は家にいないほうがよさそうだ。

つまり否定詞「not」は後ろの不定詞「to laugh」「(to) stay」を否定しているのであって、前の動詞「tried」「had」を否定しているのではないのです。ここでは「tried」も「had」も助動詞ではないことに注意してください。

また、上記の(1)を次のような(3)に書き換えてしまうと、違った意味または意味不明な文になってしまいます。(4)(5)についても同じです。

(3) I *did* not try hard to laugh at his classic gesture of despair.

(4) Had we *better* not go? 行かないほうがよいのではなからうか

(5) Hadn't we *better* go? 行くほうがよいのではなからうか。

このように考えると、「had better」を助動詞と考え、それを半丸記号で囲むよりも、「had」を動詞として考え、丸で囲んだ方がよいことになります。

さて、なぜ疑問文では「Had+主語+*better* do?」になるかですが、仮定法過去 had を「did have」と分解できないのですから、これを文頭に持って行く以外に疑問文にする方法はないように思えます。また、このように「did have」と分解できるということは、had は「仮定法過去」ではなく「過去時制」だということになります。

更にいえば、私が中学生の頃、教科書 JACK & BETTY を使っていた頃は文法も英国式でしたから、*Have you a picture book of Mother Goose?* のように、動詞 have を文頭に移動して疑問文をつくることは正当な方法だとされていました。それから見ても、疑問文が「Had+主語+*better* do?」になることは余り不自然には思えません。

また最近「had」「'd」を省略して次のように表現することは、口語では普通になりつつあります。主語が省略されることもあるようです。

You *better* take some medicine. 何か薬を飲んだほうがいい。

Better do it now. 今やったほうがいい。

だとすれば、「had better」を助動詞だと考えて、それを半丸で囲むことは、ますます不自然だということになります。なぜなら「had better」はひとまとまりの助動詞ではなく、「better」は分離可能な副詞だということを、この例文はよく表していると思うからです。

4 助動詞扱いの「ought to」について

さて、いよいよ最後に助動詞扱いの「ought to」について述べなければならないのですが、まず

ランダムハウス英語辞典の叙述を調べてみると、*auxil.v.*「助動詞」として下記のような説明があります。

- (1) 重複している動詞を省略するときは、不定詞の *to* を残すのが通例:
“*Ought I to go?*” “*Yes, you ought to (go).*” 「行かねばなりませんか」「行くべきです」.
- (2) 否定の場合に((米))では *to* を省略することがある:
Congress ought not adjourn without considering this bill. 議会はこの法案を審議せずに閉会すべきではない.
- (3) 否定の疑問文 *Oughtn't we to do...?* [*Ought we not do...?*]は一般に避けられ、代用として *Shouldn't we do...?* *Should we not do...?* などが用いられる.
- (4) 時制の一致や仮定法の過去形としては *ought* をそのまま用いる:
He felt that he ought to get your views also. 彼はあなたの意向も聞くべきだと感じたのです.
- (5) ((米))俗では *ought* の前に *had, did, should* などがくることがあるが、標準的用法ではない。⇒)【語法】:
You'd ought to think twice before you talk about murder like that. そんなに簡単に人殺しの話なんかするもんじゃない.
- (6) *should* が話し手の個人的な判断に基づいて義務・責任を述べるのに対して、*ought to* は道徳律や社会法則など拘束力を持つものに基づいて責務を述べるので、*should* よりも意味が強く、命令的である.

以上の説明を読むと、米国の中でも混乱が生まれていることが分かります。というのは、(5) *You'd ought to think twice before you talk about murder like that* (そんなに簡単に人殺しの話なんかするもんじゃない)。という例文を見れば分かる通り、*ought* は本動詞として扱われ、その前に助動詞 *had, did, should* が用いられているからです。

上の説明でも、「((米))」では *ought* の前に *had, did, should* などがくることがあるが、標準的用法ではない。→)【語法】と記述され、最後に「語法を見よ」の矢印があります。そこで「語法」の項を見ると次のような説明が見られます。

- <語法>
- ought* にはいくつかの否定形がある。*ought not* はあらゆる種類の話し言葉や書き言葉に生じ、完全な標準語法である:
- The conferees ought not to waste time on protocol.*(会議出席者は外交儀礼に時間を浪費すべきではない)
- 一方、*oughtn't* は主に口語形で、主に米国の中部方言や南部方言に見られ、そこではほぼすべての人が用いている形である。
- また *hadn't ought* は北部方言でよく用いられる口語形である。この形は語法書で非難されることもあり、教養ある人はよほど砕けた話し方をするとき以外はあまり用いない。一方、*didn't ought* と *shouldn't ought* は非標準的用法と見られている。

つまり、*ought* は BE 動詞やかつての HVAVE 動詞と同じように、後ろに副詞 NOT を置いて否定

文とすることもできるし、普通の動詞と同じように助動詞の助けを借りて、hadn't *ought*, didn't *ought*, shouldn't *ought* とすることもできるわけです。

しかし、いずれにしても、これらの叙述は *ought* が「助動詞」よりも「本動詞」として意識されることの方が多しを示しているように思われます。したがって記号づけするときには「丸」で囲む方が良いと考えます。「had better」の「had」と同じです。

また以上のことは、*ought* という動詞そのものが特殊なもので、肯定文以外には余り用いられず、否定文や疑問文では[下記のような意味の違いあるとはいえ] *should* を用いた方が無難であることを示しています。

(6) *should* が話し手の個人的な判断に基づいて義務・責任を述べるのに対して、*ought to* は道徳律や社会法則など拘束力を持つものに基づいて責務を述べるので、*should* よりも意味が強く、命令的である。

このことは疑問文でも証明されています。前述の例文(3)でも、「否定の疑問文 *Oughtn't we to do...?* [*Ought we not do...?*]は一般に避けられ、代用として *Shouldn't we do...?* *Should we not do...?* などが用いられる。」としているからです。

なぜ *ought* という動詞にこのような混乱が生まれているのでしょうか。これは *ought* が下記のような語源を持つことに由来するものと思われま

[900 年以前. 中期英語 *ought, aught*, 古期英語 *āhte* [*āogan*「持つ(owe)」の過去形]]
ランダムハウス英語辞典

そこでランダムハウス英語辞典で動詞 *owe* を調べてみると、「所有する[OWN]という動詞と同じ語源を持ち、「感謝・義務感などをいづく」の意味を有するものとして下記のような説明が見つかりました。

[3]〈ある感情を〉(人に)抱いている(())*to*... ; 〈義務などを〉(人に)負っている(())*to*... :
owe gratitude to one's rescuers 救助者に感謝の念を抱く
I owe no thanks to you. 君には何の恩義も感じていない。
owe it to oneself to do 自分に対して…する義務がある: *You owe it to yourself to ask her for a date.* 彼女にデートを申し込みたければ自分でやりなさい。
[900 年以前. 中期英語 *owen*「持つ, 義務がある, 支払わねばならない」; 古期英語 *āogan*「所有する」.] **OWN, OUGHT¹**

以上の叙述から分かることは、*had better, ought to* は *should* と同じように元々は過去形だったものを現在の叙述に転用していることです。しかも「*had better*」が「仮定法過去」の用法が今に残ったものだとすれば、「*ought to*」も次のように「仮定法過去」の用法が今に残ったものだと考えられます。

- (a) *You owe it to yourself to ask her for a date.*
- (b) *You ought [it to yourself] to ask her for a date.* 彼女にデートを申し込みたければ、彼女にデートを申し込むこと(*to ask her for a date*) = それ(*it*)を自分自身への義務だと感じて

も良いはずだ。

(c) You *ought to* ask her for a date. 彼女にデートを申し込むべきだ。

つまり「形式目的語 it」と「自明の目的語 yourself」が省略されてできたのが「ought to」という成句ではないかと、というのが私の仮説です。しかも、このように考えてくると、「had better」も次のように「ought to」と同じような仮定を経て誕生したのではないかと考えられます。

(d) You *had it better* for you to study [than not to do] [if possible]. もし可能なら(勉強しないよりも)勉強すること、それ(it)を義務として持つ方が良い。

(e) You *had better* [to] study. 君はもっと勉強した方が良い。

更にいえば「have to」も、次のように考えれば、なぜ「must」と同じ意味になるのかが簡単に理解できるような気がします。しかし、これは英語史の研究を踏まえた裏付けが必要なもので、「あくまで仮説として提起しておきたいと思います。

(d) You have it for you to study. 君は、勉強すること(for you to study)、それ(it)を義務として持つ。

(e) You have to study. 君は勉強しなければならない。

いずれにしても、助動詞扱いになっている句動詞にどのような記号を付けるのかを考えるだけで、このような深い考察が生まれることは、「記号研方式が教師・生徒の思考を活性化させる道具・武器としていかに有効か」を改めて立証しているのではないと思います。このような機会を与えてくれた戸梶さんに感謝したいと思います。

5 追記

ランダムハウス英語辞典の動詞OWEの項目末尾に、[900年以前. 中期英語 *owen*「持つ,義務がある,支払わねばならない」;古期英語 *āógan*「所有する」.->)]OWN, OUGH』という語源の記述が見られましたので、更に動詞OWNを調べてみると次のような説明がありました。

[900年以前.(形容詞)中期英語 *owen*, 古期英語 *āógen*(もとは *āógan*「所有する」の過去分詞;->)]OWE; ドイツ語 *eigen* と同語源);(動詞)中期英語 *ownen*, 古期英語 *āógnian*, *āóhñian*] ランダムハウス英語辞典

これを見ると動詞 OWN は元々は「過去分詞」であり、「形容詞」(自分自身の)(自分特有の)として用いられていたものが今では動詞としても使われるようになったことが分かります。以上の語源を一覧表にすると下記ようになります。

中期英語	古期英語	備考
<i>ought, augh</i>	<i>āóhte</i>	<i>āógan</i> 「持つ(<u>OWE</u>)」の過去形
<i>owen</i>	<i>āógen</i>	(形容詞->)もとは <i>āógan</i> 「所有する」の過去分詞; ドイツ語 <i>eigen</i> と同語源
<i>ownen</i>	<i>āógnian, āóhñian</i>	(動詞->)] <u>OWE</u> 「持つ,義務がある,支払わねばならない」->)] <u>OWN</u> , <u>OUGH</u>

こうしてみると、「ought to」の源流を訪ねることによって、OWE(動詞)→OUGH(過去形), OWN(過

去分詞→形容詞、動詞)という変遷を知るだけでなく、これが「負う」という原義で貫かれていることも知ることができます。また(義務・恩義・負債を)「負う」という原義が「owe」という単語の英語音声に似ているのも面白い現象ではないでしょうか。